駒込中学校・高等学校

「超常識」で時代を先取りし、「道」を求める教育を貫く

河合孝允校長に聞く

元ラガーマン・経営者　立石 哲也の
体当たりインタビュー



河合孝允（かわい・たかよし）
駒込中学校・高等学校校長。愛知県豊橋市生まれ。理系出身。「気づき学習」を軸に、仏教主義に基づく「心の教育」と、AI 時代を見据えたSTEAM 教育・探究学習を推進。天台宗を建学の精神とする駒込学園で、長年にわたり学校改革を牽引している。

塾経営者の立石氏が、会いたい人に会いに行き、教育・入試について率直な言葉を投げかけて対話する「体当たりインタビュー」。今回は、駒込中学校・高等学校の河合孝允校長先生をお訪ねしました。戦後間もない愛知の小学校で芽生えた教師への夢、AI 時代を見据えた大胆な学校改革、そして仏教主義に根ざした「心の教育」――。「超常識」という言葉を掲げ、偏差値のその先にある「道」を説く河合校長に、たっぷりと語っていただきました。

「洗濯、乾いたか、よし」。

戦後の小学校で芽生えた教師への夢

立石　河合先生が教師を志されたきっかけから伺えますか。

河合　小学校時代にさかのぼります。私は愛知県の豊橋の生まれで、ちょうど戦後まもない頃でした。当時の校長先生が、教育の先駆者のような方でね。学校の正面には天皇陛下とマッカーサーの写真が掲げられていて、規律礼をしてから１日が始まる。東海道沿いでしたから、お召し列車が通るときには全校生徒が線路脇に整列して、頭を下げるんです。目を上げて見てはいけない。ある雨の日など、傘をたためと言われて、びしょ濡れになりながら手を下ろして立っていました。

立石　すごい時代ですね。

河合　姉も兄も成績が飛び抜けてよくて、県の教育委員会が調べに来るほどだった。３番目の私も当然期待される。ところが私は、目立つことが大嫌いだったんです。兄のようには絶対にならないぞ、と子ども心に決めていました。

立石　それでも、校長先生には目をかけられていた。

河合　入学するなり校長室に呼ばれましてね。担任の小林先生という若い先生が連れて行ってくれた。ところが、目立つと今度は上級生に妬まれる。当時は冬でも裸足の時代です。足の洗い場で、６年生３人に水の中へ突き落とされましてね。１年生がびしょ濡れです。

立石　それはひどい。

河合　ところが、そのとき上級生の誰かが囁いたんです。「洗濯物が乾いたか、よーし」と。私の名は河合孝允（かわい・たかよし）。「乾いたか、よし（かわいたか・よし）」――もう、名前そのものでしょう（笑）。びしょ濡れのまま、思わず笑ってしまいました。からかってくる子どもというのは、いつの時代も、こういうところだけは天才的なんですよ。

立石　名前でいじられたわけですね（笑）。

河合　そこへ小林先生が飛んできて、６年生３人の頬をぴしゃりと張って、「河合君をいじめると許しませんよ」と。着替えを持ってきて、全校生徒の前で私を裸にして、体を拭いて、着替えさせてくれました。恥ずかしくてトラウマになりそうでしたが、先生が一生懸命やってくれていることを、とやかくは言えない。耐えて忍んで、苦しみ抜いてこそ花は咲く――そういうことを、そのとき学んだ気がします。

立石　現在だと許容できないですが、時代ですね！そこから、先生になろうと。

河合　校長先生とよく話すようになりましてね。戦争で供出されて失われた二宮金次郎の像を、もう一度再建したいと。「河合君、いい土台石のある場所を知らないか」と聞かれて、村山の川のあそこにありますよ、と。先生方を案内して、村の人たちが運んでくれて、その台座は今も残っています。そのとき「将来、何になるんだ」と聞かれて、「校長先生のような学校の先生になりたい」と答えたら、たいそう喜んでくださって。業務員さんに言いつけて、生まれたばかりの兎を五匹、うちに届けてくださった。当時、兎は食料でしたからね。校長先生との、これが口約束になったわけです。

小林先生と与謝野晶子の歌。

「はっと気づく」瞬間を子どもたちに

立石　教師を志したきっかけは、もう一つあったとか。

河合　その小林先生が、私が２年生のときに結婚され、ほどなくいなくなってしまうんです。お別れ会のような形で、村の神社にみんなを連れて行ってくださった。境内の銀杏がそれは見事に黄金色に色づいて、はらはらと散っていた。そのとき先生が、一つの歌を教えてくれました。

金色（こがね）の　ちひさき鳥の　かたちして　銀杏（いちょう）散るなり　夕日の岡に

立石　与謝野晶子の歌ですね。

河合　ええ。ところが当時はそうとは知らない。小学５年の国語の教科書を開いたら、その一番最初に、この歌が載っていた。旧仮名で「てふ」と綴られていてね。ああ、あのとき小林先生が教えてくれたのは、与謝野晶子の歌だったのか、と。自分も将来、子どもたちに、はっと気づかせるようなことを教えてあげられたら――。この二つが、教師を志した原点なんです。

立石　小林先生の影響を受けて国語を教えられていたのですか？

河合　いや違います。どちらかというと理科が好きでね。「先生になるなら理科の先生」と決めて、大学も理系に進みました。学生の頃から、10 年先にはコンピューターの時代が来ることは分かっていた。ただ、その速さが、これほど加速するとは思っていませんでしたが。

AI 時代に生き残る学校へ。

全教員にパソコンを持たせた改革

立石　その理系の視点が、いまの学校改革につながっているのですね。

河合　AGI（汎用人工知能）が現実になれば、日本の職業の八割は人工知能に置き換わると言われます。いわゆる二〇四五年問題です。学校というのは、現状維持に安住していると、あっという間に時代遅れになる。ガラパゴス化が最初に起きるのは、実は学校なんですよ。そのことに気づいて、校長を引き受けたんです。

立石　御校は天台宗の学校ですね。

河合　歴代、天台宗の僧侶しか校長になってこなかった学校です。私のような一般の理科の教師が校長を務めるなど、本来はありえなかった。それでも、ご縁のあったこの学校が、この先10 年、百年と生き延びるためには、AI 化を避けては通れない。ならば他校がやる前に、と。ある年の９月１日、全教員にパソコンを配りました。「二学期から机の上にパソコンが並びます。半年ありますから、来年４月には生徒をパソコンで教育できるようレベルアップしてください」と。

立石　抵抗もあったのでは。

河合　「こんなものは余計だ」「仕事が増えるだけだ」と抵抗する人もいました。しかし、時代がそれを許さなかった。改革とは反対勢力とのせめぎ合いですが、そこも乗り越えてきました。教育特区の制度も活用して、中高一貫のカリキュラムを自由に編成し、理系先進コースを設けて、STEAM――サイエンス・テクノロジー・エンジニアリング・アート・マスマティクスの教育を展開しています。３か月でモデルチェンジするような AI の時代に、学校が硬直していてはいけないんです。

「常識」を超える「超常識」。

バレンタインに 1800 人分のお菓子を

立石　改革には、反発がつきものですよね。

河合　改革とは、今ある正義を否定することではなく、その先へ行くことなんです。常識があり、非常識がある。しかし、もう一つないと生きていけない。常識を超える「超常識」です。たとえば本校では、生徒がお菓子を持ってきてはいけない。ガムや飴は取り上げられます。ところが校長室に来れば、お菓子がもらえる（笑）。

立石　それは「超常識」ですね（笑）。

河合　バレンタインの日には、1800 人の生徒がみんな来ますからね。一人 500 円としても大変な額です。これは私の自腹です。「校長だけずるい」と言う先生には、「あなたも 1800 人に自腹で配るなら、どうぞ」と（笑）。育ちの中で培った価値観、その根っこがないと、こういうことはできないんですよ。

仏教の学校がクリスマスを祝う理由。

行事に宿る「文化」を伝える

立石　クリスマスに、先生がサンタの格好で生徒とご飯を食べる、と聞いて驚きました。仏教の学校なのに、と。

河合　なぜ仏教の学校でクリスマスをやるのか。キリスト教は、もともと暑い地方の宗教でしょう。それが北欧に伝わったときに、現地の収穫祭の文化を取り込んだ。だから、いまはキリスト教を代表する行事のように見えますが、クリスマスの本来は北欧の収穫祭なんです。それを仏教が取り入れて何が悪い、と。お坊さんたちには「クリスマスツリーだけは勘弁してくれ」と言われましたけどね（笑）。

立石　なるほど、文化論なんですね。

河合　バレンタインも同じ。行事にはそれぞれ歴史と意味がある。宗教の衣をまとった「文化」として、きちんと捉えて取り入れる。うちの理事長のお嬢さん３人も本校の出身ですが、「駒込に来て初めて、クリスマスにお菓子を食べられた」と言っていましたよ（笑）。

給食で育てる「感謝」。

カスハラ時代に備える食育

立石　給食も評判ですね。共働きの家庭には、給食があると安心感がまるで違います。

河合　本校は「食育」を入れているんです。ただ給食を出すのではなく、いただく前にお唱えをする。「味の濃淡を問わず、品の多少を選ばず、いただきます」と。食べ物への感謝、命をいただいているのだという心を、給食を通して教えているんです。

立石　命をいただく、と。

河合　ですから修学旅行に行くと、宿でみんなが合唱をして、いただきますをして食べる。食べ終わればきちんと片付ける。賄いの方が驚いて、「どちらの学校さんですか」と聞いてこられる。自分勝手に大きくなったのではない、お父さんお母さんが一生懸命働いたお金で、たくさんの人が用意してくれた食事なのだ――その感謝を表せる子を育てたい。これをやらないと、カスタマーハラスメントの時代になってしまう。

立石　カスハラ、いままさに問題になっていますね。

河合　今年からカスハラ対策が法制化される時代です。本校では夏に弁護士さんを招いて、全教職員でカスハラ対策の勉強会を開きます。カスハラをしないだけでなく、させない学校をつくる。ここまで取り組んでいる学校は、そうそうないと思いますよ。

偏差値の「会」の外へ。

アラカルト入試と、これからの「人間性」

立石　入試も多様ですね。

河合　英検入試もあれば、自己表現入試、アラカルト入試もある。偏差値という「会」の外へ出て、「偏差値は関係ありません」という入試をやっているんです。

立石　一方で、偏差値そのものも上がっている。過去十年で最も伸びた学校の一つだと伺いました。

河合　40台の前半から60台まで、20近く伸びた時期がありましたね。ただ、私はこう言うんです。偏差値は、あなた方――塾や模試の側が勝手につけているものでしょう、と。偏差値50の学校に、50の生徒は送らない。5ポイント高い学校に入れて、「合格させた」と塾は経営が成り立つ。けれど、それを 10年続ければ、50の学校は45に落ちる。偏差値教育とは、そういう意味では学校のためにはならないです。

立石　だから「会」の外へ、と。

河合　偏差値は、いつしか学校の格差をつける手段になってしまった。「偏差値が違うと結婚しない」などと言う人まで出てくる。しかし、優しさや思いやりが、どこで数値化できますか。数値化できる能力なら、AI のほうがよほど賢い。これからは人間性が勝負になる。偏差値一本で生き残る時代は、もう終わるんです。

国語は民族である。

日本語の「奥ゆかしさ」を育てる

立石　校内の講習では、国語も大事にされていますね。

河合　国語は、すべての教科の基礎です。そして、国語は民族なんです。日本語が、日本人をつくっている。日本語の特色は何かというと、主語がないこと。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」――川端康成の『雪国』ですが、これを英訳しろと言われても、主語がない。ところが次の文で「列車」が出てくる。英語では列車が主語になるわけです。「私が、私が」と言わずに、自分を消してしまう。この奥ゆかしさこそが、日本語であり、「雅び（みやび）」の文化なんです。

立石　雅びの文化、ですか。

河合　それが庶民に降りてきたとき、江戸の文化が花咲いた。松尾芭蕉は「風流の初めや奥の田植歌」と詠んだ。田植歌を歌いながら苗を植えていく、その奥ゆかしさを俳句にしている。そういうことを丸ごと分かる子どもを育てたい。「粋（いき）」で「いなせ」な、江戸の花のような生徒が、うちには育つんですよ。

般若心経とアインシュタイン。

「気づき学習」が結ぶ仏教と科学

立石　仏教教育は、どんな形で。

河合　朝礼で合掌し、般若心経を唱えます。ただ唱えるのではなく「気づき学習」です。お釈迦様の一番弟子・舎利子（しゃりし）が、いくら修行しても悟れない。どうすれば悟れるのかと問うた、その答えが般若心経なんです。「五蘊皆空（ごうんかいくう）」――色・受・想・行・識、身体と、現象としての実態と、心の働き、この５つが「空（くう）」であると悟りなさい、と。

立石　その「空」を、どう説くのですか。

河合　これが、アインシュタインのＥ＝mc²につながるんです。宇宙空間は「無」ではなく、エネルギーの静止した場である。そこから星や月や地球という質量が生まれ、太陽も燃えて宇宙空間に消えていく。相互に転換している。宇宙は無限だが、その無限とは、大きさでも数でも量でもない、まったく新しい概念なんです。光の速さを超えれば、時間は止まってしまう。人類の思考力には、必ず限界がある。その限界を、アリストテレスやプラトンは「神（ゴッド）」と名づけた。

立石　仏教とキリスト教の違いも、そこに。

河合　キリスト教は「全能の神がすべてを生み出した」と説く。しかし仏教は、「空」の世界を証明していく。絶対的な救いは持たない。あなた自身が悟りを得て、あなた自身が仏になりなさい、と諭す。お釈迦様は「私は全能者ではない」と言い切った。ここに、東洋思想と西洋思想の違いがあるんですよ。こういうことを、時々、子どもたちに分かりやすく話すんです。

中一から自走ロボットを。

探究学習と STEAM 教育の最前線

立石　探究学習にも力を入れておられる。

河合　埼玉大学と提携して、STEAM 教育センターの先生に来ていただいています。中学１年から自走ロボットを作らせる。自分でプログラミングして、自分のスマホで走らせ、音楽に合わせて踊らせたりする。高大連携で、いろいろな大会にも出場していて、ニューヨークの大会で金賞を取って帰ってきた生徒もいます。

立石　中学１年からですか。

河合　高校生になると、グループで、夏休み中に農業用のロボットをつくる。福島県が公募した農業改革のテーマで、種まきから収穫までを一台のドローンでこなす。これも金賞を取って、大手企業が「ぜひ商品化させてほしい」と。大学の先生が、「うちの大学の学生よりレベルが高い」と驚くほどです。中高６年間があるから、それだけのゆとりが生まれる。国際コースの生徒たちが、自主的にやっているんですよ。

語り継ぐ「平和」。

NHK も注目する平和教育

立石　平和教育にも取り組んでおられる。

河合　仏教の学校ですからね。NHK が 80 周年記念で「あちこちのすずさん」という番組をやっていて、全国から五校が選ばれた。その一つが本校なんです。生徒たちが、東京大空襲を体験された方のところへ、お話を聞きに行く。

立石　語り継ぐ、ということですね。

河合　ある方は、学童疎開で田舎に行っていて助かったけれど、夜のうちにご家族は全員亡くなってしまった。思い出すのも辛く、人に語ることもしてこなかった。それが、この歳になって初めて、君たちのような若い子に本心を語ることができた、と。「これで自分もあの世で両親にきちんと伝えられる。ありがとう」と、私宛にお礼状が届きました。生徒は世代を継ぐ仕事を淡々としているだけですが、語るほうは、人生を語っておられる。今度、広島や長崎から選ばれた学校とも集いを開こうと、三月頃を目標に企画しています。

好きなことを、好きなだけ。

和太鼓部と、部活動が育てるもの

立石　部活動も盛んですね。

河合　和太鼓部は 80 人もいて、世界大会で金賞を取ってきました。朝から晩まで太鼓を叩いて喜んでいる。「太鼓なんか叩いていないで勉強しろ」という学校ではないんです。好きなことを、好きなだけやって、大人になりなさい、と。ボランティア部は、幼稚園や保育園が休みのときに出向いて、子どもたちに教えてあげたりしている。

立石　のびのびしていますね。

河合　１つジンクスがあって、合唱部に入ると早稲田に受かるんですよ（笑）。うちの卒業生の７割近くが、そういう大学に進みますから、勉強もそれなりにやっているんでしょうね。

あらゆる宗派を受け入れて。

「和顔愛語」が布施の本義

立石　お寺のお子さんも多いとか。

河合　多いですね。本校はもともと、国家的な学問所として開かれた歴史がありますから、どの宗派も受け入れる。１番多いのは浄土宗でしょうか。浄土真宗も日蓮宗も来ている。外では対立している宗派同士も、駒込に来れば、仲良く一緒にやってくれる。キリスト教も、新興宗教のご家庭も来ています。宗教も、生活哲学という視点で捉えれば、共通項がたくさんあるんです。





元ラガーマン・経営者
立石哲也の体当たりインタビュー
著者：立石 哲也

立石 哲也（たていし・てつや）
一九七五年生まれ。現在、東京都・神奈川県で個別指導塾を運営。教室運営の傍ら、「子どもたちに幅広い選択を！」という想いから、ONETES 株式会社で教育統括コネクターとして活動中。現在は YouTube 動画、合格ONEテスト（旧・合判模試）「偏差値５を上げる」に出演。また、この対談記事を五年間まとめた本を Amazon Kindle 版で絶賛販売中！！

立石　なるほど。

河合　ただ、危ういのは「信者」をつくってしまうこと。そこから不正が生まれる。だから朝礼で徹底するのは、「布施の本義は和顔愛語（わげんあいご）だ」ということ。和やかな笑顔と、相手を思う優しい言葉。それが布施の本質なんです。お坊さんがお布施をいただくのも、１人ではいけない、必ず２人以上でやりなさいと。どんな宗教であれ、相手を幸せにするための哲学でなければ意味がない――そう生徒に教えています。

偏差値の先にある「道」。

100 年後も生き残る学校とは

立石　最後に、これから駒込をどんな学校にしていきたいですか。

河合　思いのある人には、思いがある。その思いを表現できる場でありたい。偏差値の高い子だけ来てください、ではないんです。人生には四苦八苦がある。生老病死、愛別離苦、思い通りにいかない苦しみがある。しかし、苦には必ず原因がある。それを集めて、消し去り、正しい道を行きなさい――お釈迦様の四諦（したい）、「苦・集・滅・道」の教えです。最終的には「道」になる。

立石　柔道、華道、茶道、剣道――日本文化は、すべて「道」ですね。

河合　その通りです。柔らも柔道になり、剣も剣道になり、花は華道、茶は茶道になる。日本文化はすべて「道」を求めてきた。ならば学校も、「道」を正しく残していけば、十年後も百年後も生きていける。ただし、それを組織として残すには、理屈や論理だけでなく、一番大切な「歴史性」が必要なんです。これを無視して「こうあるべきだ」といくら言っても、人の心は動かない。「あそこへ行っておいで」と、わが子を送り出してくれる人々の思いがある限り、駒込は安泰です。それを受け止めるだけの器（キャパ）を持つこと。どんなに良い学校をつくっても、人の心が去れば、それで終わりなんですよ。

立石　本日は、貴重なお話をありがとうございました。

河合　こちらこそ、ありがとうございました。

【取材後記】
「洗濯、乾いたか、よし」――びしょ濡れの１年生が、名前をもじって囃され、思わず笑ってしまった。その少年が、70 余年の時を経て、AI を見据え、般若心経とアインシュタインを一息に語る校長先生になっておられる。戦後の小学校で校長先生と交わした「先生になります」という口約束を、河合先生はいまも律儀に果たし続けているのだと感じた。偏差値の「会」を飛び出し、「超常識」を掲げながら、根っこには「己を忘れて他を利する」という仏の心が一本、太く通っている。少子化の時代にあっても、これだけ「思い」の宿る学校が揺らぐことはないだろう。次はどんな学校の、どんな先生に会いに行けるのか――今から楽しみでならない。